

2013教育フォーラム シンポジウムに76名参加 「どうなる兵庫の教育？」 高校通学区が拡大して



できた。姉がいった市立西宮高校に妹が行こうと思うと、相当頑張らないといけないので小学校6年生で塾に入れた。塾はその頃から学区拡大に向けての準備がなされていた。塾の中でも競争しないといけないので中1の1学期で塾を辞めた。もう塾は絶対嫌だという。

保護者は学区が拡大して不安に思っている人はたくさんいる。小学校の子どもの会話。「兄ちゃんと一緒に市西いくねん」「お前の成績じゃムリやる」これが現実です。

西宮市教育委員会との懇談で、「学校間に格差なんかない。格差をつくっているのは保護者だ。」といわれた。保護者としては、子どもに夢をみて、現実に黙ってみてられない。現実と理想の間ですごく揺れてるとというのが保護者自身の気持ちではないか。それを伝えたいと思う。

米谷(中学校) ~ 「行ける学校」にと指導せざるを得ない
現在中学2年生を担当。6年前に複数志願制が導入されたが、西宮市では各中学校の進路担当者で情報交換してきている。学区拡大したら、新しい第2学区(阪神+丹有)では情報交換が不可能である。複数志願2年目までは今まで通りで、ランクはなかったが、3年目頃から序列ができてきた。45年間総合選抜制度だったが、オープンハイスクールで施設のいいところに人気集中した。現在の西宮学区6校が34校に拡大し、実際は中学校としては落としたいくないので、「行きたい学校」ではなく「行ける学校」になっている。「統一模試」についてもきちんとしてきていないので、うわさでしかない。元校長の天下りではないのか? という声も上がっている。

2013年兵庫県教育研究集会実行委員会が11月2日、神戸市勤労会館で2013年教育フォーラムを開催しました。「高校通学区が拡大してどうなる兵庫の教育？」をテーマにシンポジウムが行われました。

神戸女子大学講師の阿江善春氏のコーディネートで、宝塚市議の田中こう氏、中学生保護者の菅澤智子氏、中学校教諭の米谷春吉氏、高校教諭の岡本匡史氏の四人をパネリストに議論しました。

1: パネリストからの発言

菅澤(保護者) ~ 保護者は不安

一番下の娘が中学校2年生、26歳の娘は総合選抜制度で、24歳の娘は複数志願選抜制度が始まった。私自身は総合選抜制度で育った。総合選抜制度がなくなり、今度は学区が広がるらしいと聞いて、学区拡大ストップの運動をした。学校間の競争が激しくなってくるのは明らかだ。競争の中で高校受験をさせたくないという気持ちがあった。

複数志願選抜になってから成績によって行ける学校が決まっ

岡本(高校) ~ 生徒集めに忙しくなる

複数志願制は多くの問題を抱えている制度であり、通学区が拡大されるとさらに問題をひどくする。第一志望加算点がありギャンブル入試になっている。序列をつくることに拍車をかける。通学区を拡大して欲しいというのは、県民の声ではない。トップダウンとして押しつけられている。複数志願が導入されていない地域でも、拡大と同時に複数志願が実施されるという大きな問題点もある。

学区拡大が高校に与える影響は、高校間の序列や競争が煽られる。特色選抜も押しつけられており、県内でやっていないのは1校のみ。生徒集めのための中学校訪問や特色化に手を取られ、本来の生徒たちへの教育がそがれる。生徒たちは遠距離通学になり、学習や部活動の時間が減る。総合選抜のいいところを残すと県が言っていた「その他校」廃止には、明石市教委は「今から復活させると混乱する」という。

田中(宝塚市議) ~ 地域で子どもは育て欲しい

自分自身総合選抜で、小中高と同じ仲間であって育ってきた。複数志願選抜になって、ある中学校では、公立高校の不合格者が6名から20名に増えた。市議会に「公立高校に一定の学力に達している生徒がいけるよう」という請願が出されたが、否決された。まだ複数志願制5年目で検証もされないまま拡大しようとしている。

高校のことは地域の問題になっていない。地域の子供は地域で育て、地域へ帰ってきて欲しいという願いはある。学区拡大には反対とはいえない。地域の住民の方と一緒に考えていく問題である。議会では住民の傍聴をお願いしたい。

2: フロアからの発言

「上流で河を汚し、下流で浄水器を売る」

保護者の意見は、学区拡大の中身が分かりにくくて、メリットデメリットがあるのか? 分からない。説明すると「おかしい。なぜ学区を広げる必要があるのか?」という意見が出てくる。保護者や地域の方に実態を知らせていく必要がある。

支援機構の模試ですが、姫路のクラーク高校が来られたときの名刺に、創志学園グループの学校が記載されている。明日行われる模試の会場が、姫路ではクラーク高校である。天下りでかなりのかたが数多く創志学園グループに就職されている。自分たちで学区を拡大しておきながら、大変だといって4000円集めて模試をする。「上流で河を汚しておきながら、下流では浄水器を売るようなものだ」(姫路の中学校教師)

詳しいことは周知されていません

子どもは中学3年、2年と小学1年生という。明日の統一模試を息子が受けて4000円のお金を落としてくる。塾も創志グループの塾です。保護者としては、学区拡大に対して詳しいことは、周知されていない。中学校からの情報は少なく、塾の

情報がすごく多いし早く頼っている現実がある。拡大すると序列はすすむと思うし、決まってしまうと凍結はどうかのかなと思うけれども、今保護者で一般の方々は、拡大に対しての話や説明や資料とかを学校を通じて配ってもらわないと、拡大という言葉でしか分かっていません。なぜ拡大するといいいとか、問題があるのかとかを分かりやすい言葉で説明して欲しいと思う。(神戸の中学校PTA役員)

阿江 ~ 今後も声をあげ続けよう

情報が県民に伝わっていないもとので、学区拡大を軸とした兵庫の教育の在り方についてのフォーラムだった。これを通して伝えてきたことは、親とか教師や教育に携わる人たちが、兵庫の教育の将来について真剣に話し合うということは大事なことである。1年前になっても具体的に決まっていない。不安になることが決まってしまう。地域の良さが、学区が拡大すれば分からなくなってしまう。地域の絆が失われてしまう。それぞれの立場で声をあげていくことを今後も続けていく。それぞれの立場で運動や声を広めていっていただきたい。



発行所
神戸市中央区北長狭通5-2-10
兵庫県高等学校教職員組合
TEL 神戸(341)6745-6747
E-mail
honbu@hyogo-kogyoso.com
http://www.hyogo-kogyoso.com
発行人 兵庫県高等学校教職員組合中央執行委員長
雨松 康之
編集人 稲次 寛
定価 1部 20円
半年分 120円
組合員の購読料は組合費含め徴収

組合加入のご相談
や組合に対するご質問、全教共済についてのご質問は、高教組本部に気軽に
お問い合わせ下さい
TEL 078-341-6745

「女性教職員学習交流集会 i n 宮城」に参加して

10月12日～13日

いなみ野特支分会 中西 園枝

仙台の秋保温泉で第23回学習交流集会在行われました。実は宮城開催は昨年の予定でしたが、2011年3月に震災が起こり今年になったいきさつがあります。今回震災復興の最中、全国の仲間を迎えるために力の限りを尽くしてくださった宮城の皆さんに感謝です。

全体会の記念講演は『チェルノブイリと福島 福島原発事故は何をもたらしたのか』と題して、フォトジャーナリストの森住卓さんが原発事故後いち早く現地に入り、取材されたたくさんの画像を紹介してくれました。『原発さえなければ...』『今の除染は移染だ』テレビや新聞で報道されていない事実がそこにありました。それは東電や政府が隠したい真実なんだ!と思うと悲しくて悔しくて涙がとまりませんでした。

全体会の最後は、構成劇・合唱『子どもたちの未来のために...負けるわけにはいがないちゃ!!』宮城の先生方が作った曲を中心として、震災以降宮城の女性教職員の皆さんがどのようなあゆみを進めてきたかを伝えてくれました。これまた涙、涙の感動でした。2日目は2つの基礎講座と4つの分科会が開催され、2日間を通して557名の参加。大成功の宮城大会でした。

終了後も南三陸、仙台近郊、福島へのオプショナルツアーが実施され、私は福島への1泊2日のツアーに参加しました。仙台から南下して、はじめの訪問地福島県相馬市に向か

いました。車窓からは本来なら建物や海岸の松林で見えないはずの遠くの海がすくと見渡せました。津波がすべてを壊した跡でした。がれきやこわれたままの家屋もまだ所々に残っていました。

相馬市では野馬土・相双地区農民連が3・11以降開いた直売所を訪れました。「福島の被災農民を支えよう」「相馬に復興の砦を」と人々が集まって頑張っていました。ここでは放射能測定装置で検査して安全なものだけを販売していました。相馬港をまわりながら、青年漁師さんたちの震災から今日までを聞きました。2年半たってやっとの思いで試験操業までこぎつけたのに、「汚染水漏れ」。しかし、決して復興への歩みをあきらめない若い漁師さんたちの思いが胸を打ちました。

そのあと宿泊地松川浦のかんの屋さん(ここも津波の被害に合いました)で、学校栄養士さん、小中学校の教職員の方から福島の学校や子どもの現状を話してもらいました。学校給食では、毎日食品の放射線量を検査していること。原発から15キロの小高中学校は現在、31キロの地点の鹿島小学校の校庭の仮設校舎で再開しており、「大家さん」(小学校)と時間帯を合わせるために中学は昼休みがないこと、思春期の子どもたちが狭い仮設で暮らすことの影響や賠償金が親たちの生活を変えたこと、それを見ながら育ている子どもたち、学校に設置されたモニタリングポストは鉛で覆われ正確な線量は計測されて

いないこと、南相馬の石神第一小学校は飯舘村に隣接した仮設で再開、しかし通学路が除染されていないので親が車で送り迎えしていること、などなど。多くの課題が山積みのようにでした。

「遠路はるばる放射能の降る町にようこそ」と福島原発訴訟『生業を返せ、地域を返せ』原告団団長さん。訴状では東電や国は「いかに原発の危険性をわかっていたか」について追及。しかし福島で暮らす人たちは放射能のことを考えるのも辛い人も多いので、時間をかけて疲れないうちでやっていく、と明るくにこやかに話しておられました。

翌日は南相馬市へ。本来なら時期的にも「見渡す限りの稲穂」のはずが、荒れた土地。現在南相馬は米を作ってはいけぬ地域とされています。昨年4月から入れるようになった小高地区の小高工業高等学校を訪ねました。生徒たちが残した多くの自転車、玄関のガラスに貼られたままの入試業務を伝える貼り紙。草だらけのグラウンド。慌ただしく放射能から避難した当時のようすが浮かびました。草が生い茂りどこが線路かわからないJR常磐線。家々の屋根には震災当時からかけられたままのブルーシート。除染作業の人がちらほらいる他、本当にひと気のない町です。近くの小高中学校ではグラウンドの除染作業がようやく始まっていました。



《小高工業高校の自転車置き場》



《小高中学校のグラウンド除染》

この4月から許可を得れば立ち入ることができる(でも宿泊はだめ)浪江町。見渡す限りのセイタカアワダチソウの草原。その中に船が何艘も傾いたまま、倉庫の2階にぶつかったままの漁船、折れ曲がった電柱、津波に抜かれた家。その向こうには、福島第一原発の煙突が見えていました。原発に近い町、

2年半以上が経っても放射能のため何も手をつけられていない町でした。殺処分になるはずだった浪江町の牛たちを集めた「希望の牧場」。各地から集められた汚染された藁を食べて命をつないでいました。その牛たちの向こうには、皮肉にも東京へ電力を送るための高圧電線が通っていました。

最後の訪問地、飯舘村。森住卓さんが取材したいわゆる「風下の村」です。ここは30キロ圏外だったため、原発事故当初は避難地域から外され、約1か月後の4月になってから線量が高いということで急遽避難となった村です。県立農業高校飯舘校で村の人の話を聞きましたが、サッカーグラウンドでは10μシーベルトまでの線量計は「ピーピー」という音を鳴らし続けていました。また校舎横の倉庫の雨どいの下は、なんと80μシーベルト以上の数値を計測していました。震災前の飯舘村は「日本一美しい村」がスローガンだったそうです。

今回福島に行くまで、私なりに原発反対という思いをもって関心も持っていたつもりでしたが、福島

《セイタカアワダチソウの中の船》



《希望の牧場にて 牛と高圧電線》

第一原発周辺の町々の現実のありさまに衝撃を受けました。つらい現実でしたが、『原発さえなければ...』の思いをさらに強くしました。そして今回お会いした福島の皆さんはたくましくしたたかに闘っておられました。この現実をもっとみんなに知ってほしいです。10年後20年後の子どもたちの未来のために私たちが今できることをやっていきましょ



《モニタリングポスト》

全国の仲間の助け合いだからできる
全教共済の **総合共済**
月々600円で 給付がいっぱい!

結婚1万円 出産5千円 結婚記念日2万円
独身者にもクリスタル給付2万円
療養見舞金1万円
火災・自然災害見舞金最高10万円 お悔み事にも

しかも、掛金は退職時に
全額戻るんです!!

